台大日本語文研究第 18 期
2009 年 12 月，頁 135-158
2009-10-05 收稿，2009-11-18 通過刊登

翻譯文學之對照分析
——中日語言之情意

周欣佳*

摘要

本文主旨爲透過張愛玲小說作品的日譯文本與原文的對照比較，分析中日語之間的語言、情意、修辭、及文化等元素之異同。

其研究觀點是藉由敘事者主觀或旁觀的觀察角度，或以敘事者置身於文本之內或置身文本之外的自我引述方式等，檢視敘事者的修辭內容，來探究其意涵與情意的表達。

關鍵詞：中日翻譯文學、對照分析、視點選擇、自我引用

* 日本東京學藝大學研究所碩士後研究

On Rhetoric Ricochet
---Playing with narrative perspectives and voices in Japanese and Chinese discourse

Chou, Hsin-chia*

Abstract

This paper discusses rhetorical effects of the Japanese literary text concentrating on two grammatical strategies. For manipulating narrative perspective, the preference toward topic versus agent are discussed. The other rhetorical strategy, self-quotation strategy is examined as a means for expressing the voices of the narrating self.

The paper analyzes these grammatical devices appearing in novelstic discourse between Japanese and Chinese. The differences of poetic effects in Japanese translation texts and Chinese original texts are linguistically identified and interpreted in semantic, rhetorical, and cultural terms, and the significance of different poetic effects across respective grammars is emphasized.

Keywords: contrastive rhetoric, Japanese in contrast with Chinese, novelistic discourse, narrative perspective, voice in discourse

* Further Studies beyond Master's Program of Tokyo Gakugei University

翻訳文学の対照分析
——中日言語に於けるパトスのレトリック

周欣佳*

要旨

本研究は、二つの文法表現から日本文学作品のレトリック効果について探究する。まずは、語り手のレトリックの “視座の選択：トピックと仕手”と、そしてさらに、語り手の声の操作とされている“自己引用”のレトリック技法について究明する。

本稿では小説作品三篇を例に、日本語を出発点として中国語原語作品と比較し考察する。翻訳された作品の両言語のテキストを分析の対象にすることによって、翻訳によって結ばれた言語観の言語の、またレトリックや文化をも含めたディスコースの、類似点や相違点を明らかにする。

キーワード：中日翻訳文学、対照分析、視座の選択、自我引用

* 日本東京学芸大学大学院修士後研究

翻訳文学の対照分析
——中日言語に於けるパトスのレトリック

周欣佳

一、はじめに

哲学者 Ortega y Gasset(1959)は、言語表現にはその宿命として、どんな場合にも豊潤さ(Eexuberancies)と言い足りなさ(deficiencies)の矛盾を常に抱えていると語っている。言語による意味伝達には言い過ぎまたは充分に言えないなどの状況はよく見られ、それが翻訳テキストの場合ならなおさらのことであり、どんなに上手な翻訳作品であろうと、このようなギャップは免れない。さらにこのギャップは、両言語のテキストをそれぞれ支える文化の距離的、或いは時間的の差に正比例する。

このような現象は、日本語から中国語に訳されるときのみならず、中国語から日本語へ訳されるときにも起こり、原作と翻訳テキスト間の翻訳のずれは両方向に見られ、談話のレベルだけでなく、言語のあらゆる面に潜んでいる。

文壇の奇跡と賞賛され、中国人をはじめ無数の国内外の読者を魅了してきた大作家張愛玲には多くの代表作が見られ、各国でも高く評価されている。本研究では、その中の小説作品三篇を例に、日本語を出発点として中国語と比較し考察する。日本語を研究材料にする場合、日本語と中国語と違うという発見は、その違いを言語の普遍性へのチャレンジとしたいことであり、また、中国語と日本語が似ているという発見は、言語の相対性へのチャレンジということである。

翻訳者は言語の存在を想定し、異なる言語観で共通の意味を伝えることが出来るという前提の上で、翻訳という行為はなされている。従って、翻訳された作品の両言語のテキストを分析の対象にすることによって、翻訳によって結ばれた言語観の言語の、またレトリッ

クや文化をも含めたディスコースの、類似点や相違点を明らかにすることが図れる。

二、翻訳文学におけるパトスのレトリック研究

（一）翻訳という行為について

翻訳といわれる行為には、一般に①言語内翻訳、言い替え(intralingual translation, or rewording)、②言語間翻訳(interlingual translation, or translation proper)、③記号体系間翻訳(intersemiotic tanslation, or transmutation)、などの三種類がある(Jakobson 1971:261)[1]。その中で、我々がテーマとする翻訳は②であるが、翻訳とは言語それ自体の定義にも関係する重要な行為であり、同じ言語例えば中国語或いは日本語などの内部でも常に翻訳という行為はなされている。

翻訳文とは、原作の語り手の<主体>と翻訳者の<主体>とが交渉する、複数の主体が織り成すディスコースである。翻訳の主体は「乗り継ぎする主体」として、原作の読み手であると同時に、翻訳された作品の書き手としての主体でもあるが、実際、翻訳は複雑な問題を抱えており、語彙がマッチしない、同様の形態素がない、類似した統語上の規則でもそれがもたらす意味が違うなど、その原因は限りない。言語間の翻訳は、オリジナルにある脚韻を踏んだリズムのよさをそのまま反映することは出来ず、さらに、同じような言語形式のレベルでは、完全にマッチする表現はない(Jakobson 1971:261)。

また、「翻訳者は裏切り者」と言われるように、言語間の差とは、Jakobson の言葉に象徴されるように、「ある言葉で言えるかどうか、というレベルの問題ではなく、そう言わねばならないかどうか」(Jakobson 1971:263)という種類のものである。

Becker(1995)[2]が文の伝記(biography of a sentence)という言葉で表

[1] Jakobson, Roman.（1971）On linguistic aspects of translation. In Selected Writings, Vol. 2, 260-266. The Hague: Mouton.
[2] Becker, A. L. (1995) Beyond Translation: Essays toward a Modern Philology. Ann Argor: The University of Michigan Press.

現しているように、言語は、我々の考え方や感じ方、そして蓄積されつつある自分の歴史や過去の言語経験と密接に関係しており、さらに、具体的な<情報>よりもっと掴みにくい人間の感情や情緒と言われるものに至っては、共有することが困難になり、翻訳はなおさら困難さを増すのである。

周知のとおり、理想の翻訳というものが何であるか、またそのようなものが存在するのかどうか、など、翻訳に関するも問題点は多いが、本研究では、それらを別として、原作と翻訳のパトスのレトリックの差について探って行きたい。

（二）パトスのレトリックと語り手としての主体

本研究で扱われるパトスのレトリックの技法は、語り手である主体がテキストとどのような関係にあるかにかかわる。Stanzel(1971)[3]は、narrative situations という言葉を挙げ、語り手がテキストの中にどのように、そしてどの程度顔を出すか、語り手がテキストとどのように交渉しあうかを問題とした。

語り手のスタイルとして、authorial と fugural の二種類がある(Stanzel 1971)が、authorial narration とは語り手が物語の場に繰り広げられる出来事や思索について、読者に話しかけたりコメントしたりして、物語世界の場に出現するケースである。一方 fugural narration は、読者が登場人物の一人として、その場にいるような錯覚を起こすような構成で語られるスタイルである。本研究で考察対象となる三篇の小説の語り手のスタイルは、figural narration であり、authorial と fugural の両方のスタイルを含んでいる。語り手は、物語の中で繰り広げられる出来事に参加する者、つまり場を〈経験する主体〉であると同時に、その出来事を物語る〈語る主体〉でもある。

このような語り手の存在やそのテキストとの交渉を理解する上に関係するのが、パトスのレトリックの技法である。言語のストラテジーや各種のレトリックの技法が、語り手としての主体の姿を規定

[3] Stanzel, Franz. (1971) Narrative Situations in the Novel: Tom Jones, Moby-Dick, The Ambassadors, Ulysses. Tans. By J. P. Pusack. Bloomington, IN: Indiana University Press.

するのであり、語り手の表現を観察することで、その語り手のテキストへの距離を理解することも可能となる。Dixon and Bortolussi(1996)[4]の研究では、物語の中の引用部分がどのように提示されるかによって、読者が語り手をどのような距離に見ているかを決める要素となりうることを統計的に調べた、実証的なものがある。例えば、語り手が free indirect style で引用された内容は、内省する登場人物に距離的に近いところから語っているので、読者には好意的に解釈されるのである。

本研究では、語り手のレトリックを、視座の選択や自己引用のパトスのレトリックの技法と照らし合わせながら語り手の情意の表現について研究する。

（三）視座の選択：トピックと仕手

我々が文学作品を読むとき、怒りを覚え、涙し、また深く感動するなど様々な感情的な反応は、市川（1975）[5]が述べたように、人々は相手の行為に具体的のみならず観念的にも感応することができ、特に、読書経験では、イメージの世界の出来事を追っていく過程であるが、観念的にではあれ、情感を体験する。それは、我々は、小説を満たす言語記号の意味をイメージされた場を通して感応的に経験するからであるが、作品を経験する際には、作品鑑賞者としての視点が問題となる。読者は、理解しようとする相手の視点に立って物事や出来事を見つめ、作品の内部の視点から交渉意を、つまり情報と情意を含んで読み取る。

作品鑑賞と視点についての先行研究として、宮崎・上野(1985)[6]が挙げられる。認知心理学的な観点から論じているが、文学作品を中心として視点理論を提唱する。視点の構造について、2 点にまとめられる。(1)「近くや概念理解のような対照認識は視点の空間的、時間的移動によって可能になる」こと、(2)「対象認識は対象について

[4] Dixon, Peter and Marisa Bortolussi. (1996) Literary communication: Effects of reader-narrator cooperation. Poetics, 23, 405-430.
[5] 市川浩（1975）『精神としての身体』東京：勁草書房
[6] 宮崎清孝・上野直樹（1985）『視点』東京：東京大学出版会

知るという面のほかに、それを見ている視点のあり方についての認識を常に伴う」ことである。

具体的には、文学作品を理解するとき、情景理解と心情理解に分けられるが、作者がどこにいてどのように見ていたか、つまり設定された視点からその見える様である〈見え〉を理解することが情景理解につながるのである。「見え先行方略」とはこのような対人理解の方法を指し、読み手は視点を設定することにより、〈見え〉を生成し、その見えを通して作品中に存在する情報を統合しながら情景を理解するわけである。

さらに、他者の心情を理解するのには、その人が持っている目的、気持ち、感情といった心情を推測して、それらを自分でも持ってみようとする過程が含まれるような、〈なる視点〉の経験により、視点はもっと深い意味で理解とかかわっているのである。パトスのレトリックとして視座の選択の技法が挙げられる。

視座は、語り手が描写する世界を見つめる場所を指して言う。状況に対する異なった〈見え〉の捉え方、つまり視座の選択により、視点の移動など視点設定にも影響を与える。日本語では、トピックに関する〈見え〉を重視する傾向があり、パトスのレトリックの技法を採用してトピック・コメントになっており、仕手よりむしろトピックがディスコースの起点として選ばれる事が多い。主体の行為が暗示されて入るものの、読者がイメージするのはトピックの〈場〉であり、行為の因果関係は暗示されず、あくまでその場の描写が中心となる。

これに対して中国語テキストでは、描写の方法として、例えば我など人物が仕手となる行動の描写が基軸となり、仕手を取り立てるレトリックが採用されている。

（四）自己引用

引用表現は、言語行動に直接言及することが出来、引用する者・される者という少なくとも 2 つの声が同時に聞こえ、機能として、複数の〈声〉を表現する操作として捉えられ、例えば自己引用や想

定引用が挙げられる。特に自己引用は、発話行為の軽減、強調や躊躇を指標したり、言語表現の吟味を表示する機能を果たし、発話行為の性格づけ、つまり Lakoff(1980)[7]の言う Speech Act Qualification のストラテジーとしてある。今我々がテーマとしている物語の語り手の主体的態度に関しては、「と思う」という広義の引用表現に焦点を当てて考察する。

日本語テキストの「思う」の機能を三種類に分けて考えてみる。

① まず最初のタイプは、語り手の〈発話態度〉の指標である。この使用には通常アスペクトやテンスの変化が見られず、「と思う」という形で用いられるが、このタイプの「思う」は中国語としては表現されにくい。

② 二番目のタイプは、考えたり思ったりする行為を指して使う場合である。この場合の「思う」は行為を指しているので、それなりのアスペクト変化を伴うこともあるし、また動作について説明する副詞を伴うことが出来る。「思っている」や「うっとりと思う」のように用いられることは、この種の「思う」が行為･行動を指していることを実証するものである。

③ 三番目のタイプは先行する節の内容が主体の思考の内容であることを印づけ、思考内容を直接話法的に提示する機能を果たす。

二番目と三番目のタイプの「思う」は中国語に表現出来ることが多い。なお実際には、日本語訳では行動を指していても中国語では表現されない場合もある。

このように、自己引用は複数の「声」の操作と発話行為の性格付けや言語表現の吟味機能を持ち、談話自体のみならず、そのコンテキストにまで操作を及ぼしながら各種の効果をもたらしており（メイナード 2005）[8]、引用表現もパトスのレトリックの効果を発するのである。

---

[7] Lakoff, Robin. (1980) How to look as if you aren't doing anything with words: Speech Act Qualification. Versus 2, 29-47. Milan: Bompiani.

[8] メイナード(2005)『談話分析の可能性』くろしお出版

本研究では、自分の言動や思考を引用する自己引用に焦点を当て、翻訳作品中の使用例を抜き出して比較し考察する。

（五）パトスのレトリックの観点からの研究

メイナード(2005)は日米文学の翻訳作品をデータに、表現性の比較をした結果、英語では時制の転換や文副詞など他の手段によって表現することが多いのに対し、日本語では言語主体の描写方法を、言語に与えられた統語上のコードで表現されていることが指摘された。

周（2009）[9]は長編小説の日本語訳と中国語作品について研究したが、視点の移動：場と仕手、と視座の選択：トピックと仕手のレトリックについて分析した結果、日本語翻訳作品とオリジナル・テキスト間には言語のパトスのレトリックの表現の差が多々見られた。

三、語り手のレトリックの考察

（一）考察にあたって

言語は〈感じる主体〉の人間の行為としてある。それは、理性と感情を経験する身体が参加する行為としてある。そのため研究の対象となる言語も、その社会で創造され、生かされ、そしてさらに消費される文化の一部として、人々が参加するディスコース現象でなければならない。本研究で使用するデータは、現代日本語と中国語がそれぞれ代表する文化として存在する言語現象からその断片をデータとして選んで使用するものである。小説は会話よりむしろ語りの部分が多いため、ビジュアルなものがない代わりに、話し手が登場人物の会話行為について説明することがある。そのような発話行為についての具体的な情報は、考察に多くのヒントを与えてくれる。

このような理由から、本研究ではデータとして、アイリーン・チャン（張愛玲）著、南雲智訳の短編小説「愛ゆえに」・「浮き草」・「お久しぶり」を小説集『ラスト・コーション』より、そして中国語原語

[9] 周欣佳（2009）「翻訳文学における語り手の情意」『東方技術学院 2009 外國語文教學研討會論文集』東方技術學院

作品『惘然記』中の六篇より「多少恨」・「浪花浮蕊」・「相見歓」など三篇を選択した。文壇の奇跡と賞賛され、無数の中国人読者を魅了してきた大作家、張愛玲には多くの代表作が見られ、この短編小説集も国内外で高く評価されている作品の一つである。

上記作品を例に、語り手の直接談話(direct discourse)と考えられる作品の語り部分を考察の対象とした。本研究で分析するデータはあくまでディスコースの断片を単位とする。データの提示法については、日本語訳を（J)、それに相応する中国語原作部分を（C）として提示し、段落の冒頭を///で示す。そして、特に論点と関係のある部分に下線を施す。

考察の対象となるデータの分析法は、質的･解釈的の手法をとる。分析の方法は、対照談話分析から採用するが、視点に関する視座の選択（トピックと仕手）のレトリックの技法について、日本語訳と原語作品を比較することにより、翻訳によって結ばれた言語間の言語の、またレトリックや文化をも含めたディスコースの、例えば語り手のパトス的な表現などの類似点や相違点について観察する。そして、原語作品と日本語訳全体に充満する情意表現の原理というようなパトスのレトリックや､そしてパトス性と文化･社会の関係を探りたい。

四、情意表現のレトリック分析

（一）視座の選択：トピックと仕手

視座を語り手はどのように選択するかは、視点の移動などにも密接なかかわりを持つこととなる。日本語では、トピックに関する〈見え〉を重視する傾向があり、〈見え〉を理解することは、文学作品の理解に際した情景理解につながるのである。

（1C）然而儘管兩個人都是很痛苦，蠟燭的嫣紅的火苗卻因為歡喜的緣故顫抖著。（多少恨：135）

（1J）二人は苦しみの中にいるにもかかわらず、蝋燭の真っ赤な炎は歓喜にうち震えているようだった。（愛ゆえに：115）

（2C）連游泳都不會的人，到了海上成了廢物，可以全不負責，更覺無事一身輕。（浮花浪蕊：11）

（2J）水泳の出来ない人間は海へ来たら完全な廃品だ。それだけに一切の責任を負わず、全てと関わりがないので実に気楽だった。（浮き草：152）

（3C）新裝的火爐，因為省煤。（相見歡：11）

（3J）新しく備えたストーブは、石炭節約タイプだった。（お久しぶり：9）

（1J）の「蝋燭の真っ赤な炎は」という表現には、語り手の経験した物事が語られていることはいる。しかしその言語化でとり立てられるのは、「私」ではなく、あくまで「炎」であり、それが提題の「は」に伴われていることでトピックとなっている。中国語でも、確かに炎が描写されるのだが、それは「因為歡喜的緣故顫抖著」、という仕手の動作が捉えられてからのことであり、〈主体〉の行為の結果としてうち震えている、という認知プロセスが感じられる。

（2）の場合でも、（2J）の「水泳の出来ない人間は」という表現には、語り手の経験に基づいた物事が語られていることはいる。しかしその言語化でとり立てられるのは、「私」ではなく、あくまで「人間」である。そしてそれが提題の「は」に伴われていることでトピックとなっている。（2C）でも、確かに人間が描写されているが、それは「到了海上成了廢物」、という仕手の動作が捉えられてからのことである。

（3）も同様に、（3J）の「新しく備えたストーブは」という表現には、語り手の経験した物事が語られていることはいる。しかしその言語化でとり立てられるのは、あくまで「ストーブ」であり、それが提題の「は」に伴われていることでトピックとなっている。これに対し、（3C）で見られるストーブへの描写は、「因為省煤」という仕手の動作が捉えられてからのことである。

このように、中国語テキストでは、仕手を取り立てるレトリックが採用されているが、日本語訳では、トピック・コメントの関係と

なっており、主体の行為が暗示されてはいるものの、読者がイメージするのはトピックの〈場〉であって、行為の因果関係は暗示されず、あくまでその場の描写が中心となる。

同様の例を挙げてみる。ここではトピック･コメントの関係を明らかにするために、〈先行節＋の〉と「だ」表現の括弧と下線を施す。

（4C）家茵最後一次見到她父親的時候，他還是個風致翩翩的浪子，現在變成一個邋遢老頭子了，鼻子也鈎了，眼睛也黃了，抖抖呵呵的，袍子上罩著件舊馬褲呢大衣。（多少恨：108）
真正的了解一定是從愛而來的，但是恨也有它的一種奇異的徹底的了解。（多少恨：109）

（4J）（彼女がこの父親と最後に会った）のは、父親がまだちやほやされている遊び人だった頃で、それが今ではみすぼらしい老人に変わってしまっていた。
真の理解はきっと愛から生まれるに違いない。だが、恨みからも得体の知らない徹底さによる了解が生まれるものなのだ。（愛ゆえに：72）

（5C）不等上海淪陷，已經親日了。
她不知道怎麼，認定他不懂日文。其實怎麼見得人家不懂？（浮花浪蕊：59）

（5J）（上海は日本軍の非占領地区になる前から、すでに親日的になっていた）のだ。
なぜだか（洛貞はリチャードソン氏が日本語が出来ないと思い込んでいる）のだが、まったくの根拠のないことだった。（浮き草：175-176）

（6C）她避免說找事，找事總像是辦公室的事。她就會做菜。
其實儘可以說一聲「你來跟我住。」但是她不願意承認她男人不會回來了。（相見歡：80）

（6J）荀太太は仕事探しが話題に上がることを避けていた。仕事といえば、どうしても事務所での仕事を思い浮かべるが、（彼女が出来る）のは料理だけだった。

実は「私と一緒に住めば」と言ってあげれば、それですんだのだが、伍太太にしてみれば、（夫がもはや自分のところに戻ってこないことを認めたくなかった）のだ。（お久しぶり：210）

（7C）///他第二次出現，是在夏家的大門口，宗豫趕回來吃了頓午飯剛上了車子要走——他這一向總是常常回來吃飯的時候多——虞老先生注意到那部汽車，把車中人的身分年紀都也看在眼裏。（多少恨：111）

（7J）///（父親が次に現れた）のは、夏家の玄関前で、宗豫が戻ってきて昼食を済ませて、車で出かけようとしているところだった——最近、宗豫は戻ってきて昼食をとることが多かった。（愛ゆえに：75）

（8C）///晚上就睡在沙發上？（浮花浪蕊：39）

（8J）///（夜はソファーで寝る）のだろうか？（浮き草：143）

（9C）///她就最怕每逢寒暑假，他總要糾合男女友人到歐洲各地旅行觀光。（相見歡：77）

（9J）///（彼女にとって、一番苦手な）のは夏休みと冬休みだった。伍氏がいつも男女の友人に声をかけてヨーロッパ各地へ観光旅行に出かけたから。（お久しぶり：206）

（4J）の部分は「（彼女がこの父親と最後に会った）のは、父親がまだちやほやされている遊び人だった頃で」と名詞述語文となっており、一方（4C）は「家茵最後一次見到她父親的時候，他還是個……」と名詞化なしで表現されており、家茵という仕手に焦点が当てられる構成となっている。

（5J）の部分は「（上海は日本軍の非占領地区になる前から、すでに親日的になっていた）のだ」と「なぜだか洛貞はリチャードソン氏が日本語が出来ないと思い込んでいるのだ」と名詞述語文となっており、（5C）の中国語テキストでは她という仕手に、焦点が当てられており、「不等……已經親日了」と「她不知道怎麼，認定他不懂……」などと名詞化なしで表現されている。

（6J）の部分は「（彼女が出来る）のは料理だけだった」と「伍太太にしてみれば、夫がもはや自分のところに戻ってこないことを認めたくなかったのだ」と名詞述語文となっているのに対し、一方（6C）は「她就會做菜」と「她不願意承認……」と名詞化なしで表現されている。

（7J）の部分は「（父親が次に現れた）のは、夏家の玄関前で、宗豫が戻ってきて昼食を済ませて、車で出かけようとしているところだった」と名詞述語文となっているが、（7C）は「他第二次出現，是在夏家的大門口，宗豫趕回來吃了頓午飯剛上了車子要走……」という表現となっており、他という仕手に焦点が当てられる構成となっている。

（8J）は「（ソファーで寝る）のだろうか」と名詞述語文となっているのに比べ、（8C）は「就睡在沙發上」と名詞化なしの表現となっている。

（9J）の部分は「（一番苦手な）のは夏休みと冬休みだった」と名詞述語文となっているが、（9C）では「她就最怕每逢寒暑假……」と名詞化なしの表現が見られ、「她」という仕手に焦点が当てられる構成となっている。

以上、（4J）から（9J）では、〈先行節＋の〉がトピック化され、それに答える形で「だ」のコメント表現が用いられている。いわゆる〈X は Y だ〉という文型である。日本語訳ではこの形が好まれて用いられるのに比べ、（4C）から（9C）の中国語テキストでは、「家茵」・「她」・「他」という仕手に、焦点が当てられる構成となっている。

もちろん中国語にも、〈X は Y だ〉という文構成が使われないわけではない。

（10C）///第二天宗豫還是來了，想送她上船，她已經走了。（多少恨：150）

（10J）///翌日、宗豫はやはりやって来た。（彼女を見送るつもりでいた）のだが、家茵はすでに出てしまっていた。（愛ゆえに：139）

（11C） ///她也是事後才想到，想必是一時天良發現，激動得輕性神經錯亂起來，以致舉止乖張。（浮花浪蕊：63）

（11J） ///（洛貞もあとになってようやく分かった）のだが、あの時はきっと精神的不安定で動揺し、情緒の激しい変化による軽度の精神錯乱を引き起こし、不可解な行動をとってしまったに違いない。（浮き草：183）

（12C） ///她母親當初就是跟父親一塊出去的，她還是在外國出世的，兩三歲才託便人帶她回來，什麼都不記得，多冤！（相見歡：75）

（12J） ///苑梅の母親は実は昔、夫について海外へ出ていて、（苑梅も海外で生まれた）のだった。二、三歳のとき、親が友人に頼んで帰国してしまったため、何も覚えていなかった。（お久しぶり：201）

（10）に見られるように、（10C）「想送她上船，她已經走了」は名詞化の表現が使われており、（10J）「（彼女を見送るつもりでいた）のだが、家茵はすでに出てしまっていた」のレトリックの技法と類似している。

（11J）「（洛貞もあとになってようやく分かった）のだが、あの時はきっと……」とあるが、（11C）「她也是事後才想到，想必是……」も同様に〈X は Y だ〉という文構成が見られる。

（12C）では「她還是在外國出世的」とあるが、（12J）「（苑梅も海外で生まれた）のだった」のように、中国語テキストでも、〈X は Y だ〉という文構成が見られる。

（10C）から（12C）の例に見られるように、確かに日本語のレトリックの技法と類似している。しかし、やはり、日本語訳がパトスのレトリックの技法を採用してトピック･コメントになっているところの多くは、中国語テキストでは仕手をとり立てるレトリックを採用しているのである。

（二）自己引用

ある種の引用表現も、パトスのレトリックの効果を発する。メイ

ナード（2000）[10]や Maynard（1998）[11]で自己引用について分析した結果、その機能を複数の〈声〉を表現する操作として捉えた。特に自己引用は、〈発話行為の性格づけ〉の〈ストラテジー〉としてあり、発話行為の軽減、強調、躊躇を指標したり、〈言語表現の吟味〉を表示する機能を果たすことを主張した。本研究でテーマとしている物語の語り手の主体的態度に関しては、「と思う」という広義の引用表現に焦点を当てて考察する。

もっとも、「思う」には異なった機能があり、それによって、より頻繁に中国語化されたりされなかったりする。以下、各例に使われる「思う」に基づいて、「思う」の機能を各種類ごとに分けて考えてみたい。

（13C）看到那些火爐飯鍋什麼的，先不過覺得好玩，再一想，她這地方才像是有人在這裏過日子的，不像他的家，等於小孩子玩的紅綠積木搭成的房子，一點人氣也沒有。（多少恨：106）

（13J）ストーブや鍋を見て、最初はただ、多少のもの珍しさを覚えたに過ぎなかったが、考えてみれば、彼女のこの家こそ、人間が実際に生活している場に思われた。子どもが遊ぶ赤や緑の積み木で作られているような、人間の息遣いがまったく感じられない自分の家とは違うと思うのだった。（愛ゆえに：84）

まず、一番目のタイプとして、（13J）で使われている「思う」は、語り手の〈発話態度〉の指標であり、この使用には通常アスペクトやテンスの変化が見られず、「と思う」という形で用いられるが、このタイプの「思う」中国語に訳されにくい。

次に、二番目のタイプは、考えたり思ったりする行為を指して使う場合であるが、このタイプの表現を見てみる。

---

[10] 泉子・K・メイナード（2000）『情意の言語学―場交渉と日本語表現のパトス』くろしお出版

[11] Maynard, Senko K. (1998) Ventriloquism in text and talk: Functions of self- and other-quotation in Japanese discourse. Japanese/Korean Linguistics, 7, 17-37. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.

（14C）家茵想道：「噯，我自己的心只有我自己明瞭。」（多少恨：150）

（14J）「ええ、私の気持ちは私にしか分からないのよ」と家茵はひそかに思った。（愛ゆえに：138）

（15C）///我們這一代最沒出息了，舊的不屑，新的不會，她有時候這樣想。（浮花浪蕊：54）

（15J）///私たちの世代って、いちばんダメ。古い型の結婚は拒否するくせに、新しい型の結婚も出来ないのだから、と洛貞は思うことがある。（浮き草：168）

（16C）想出去找個事做，免得成天沒事幹，中學畢業生能做的事家通不過，他們面子上下不來。（相見歡：75）

（16J）毎日家でぶらぶらしないために仕事を探そうと思っても、高卒が出来る仕事など夫の実家が許すはずもなかった。あちらの面子も関わっていたから。（お久しぶり：201）

まず、（14J）「と家茵はひそかに思った」の「思う」は、（14C）では「想」と表現されており、行為を指している。

（15J）「と洛貞は思うことがある」の「思う」と（15C）「有時候這樣想」の「想」の両テキストとも、行為を指している。

（16）では、（16J）「仕事を探そうと思っても」の「思う」と（16C）「想出去找個事做」の「想」は、行動を指している。

以上、（14J）から（16J）の「思う」は、行為･行動を指している様子が見られる。

そして、三番目の「思う」のタイプの例を挙げてみる。

（17C）誰知她上次在電影院裏遇見的那個人，這時候也來到這裏，覺得這櫥窗佈置得很不錯……（多少恨：105）

（17J）ところがなんと映画館で出会ったあの人物が、そのとき、その店に現れた。彼はこの店のショーウインドーのディスプレーは悪くないと思った。（愛ゆえに：66）

（18C）「我倒成了動物園的野獸了，」她想。（浮花浪蕊：64）

（18J）「私がまるで動物園の動物になったみたい」洛貞はそう

思った。（浮き草：185）

（19C）坐在一邊一聲不出，她母親是還拿她當孩子，只有覺得她懂規矩，長輩說話沒有她插嘴的份。（相見歡：88）

（19J）そばに座って何もしゃべらないのは、母親が彼女を相変わらず子ども扱いしているので、年長者が話しているところに口をはさまないのが、礼儀だと思っていたからだった。（お久しぶり：223）

（17J）「ディスプレーは悪くないと思った」の「思った」は、この店のショーウインドーのディスプレーは悪くないことが、「彼」という主体の思考の内容であり、（17 C）「覺得…佈置得很不錯」の「覺得」は、「這櫥窗佈置得很不錯」が、「那個人」という主体の思考の内容である。

（18J）「「私がまるで…になったみたい」洛貞はそう思った」の「思った」は、「洛貞」という主体の思考の内容として「私がまるで……になったみたい」が示され、（18C）「「我倒成了……」她想」の「想」にあたる。

（19J）「母親が……だと思っていたから……」の「思っていた」が示しているのは、先行する節の内容が主体の「母親」の思考内容であることであり、（19C）「她母親……只有覺得……」の「覺得」も同じことがいえる。

このように、（17）から（19）の「思う」に見られるように、このタイプは先行する節の内容が主体の思考の内容であることを印づけ、思考内容を直接話法的に提示する機能を果たす。考察によると、二番目と三番目のタイプの「思う」は中国語に表現できることが多い。

しかし、（20）から（22）のような場合も見られる。

（20C）他看看那燈光下的房間，難道他們的事情，就只能永遠在這房間裏轉來轉去，像在一個昏黃的夢裏。（多少恨：150）

（20J）彼は明かりに照らされている部屋をじっと見つめ、二人の恋は永遠にこの部屋に閉じ込められて徘徊し、まるでほの暗い夢のなかに置かれているだけなのかと思った。

（愛ゆえに：137-138）

（21C）既然到日本去，可見不是仇視日本人，分明看不起人。（浮花浪蕊：65）

（21J）日本へ行くのだから日本人を敵視していないことは明らかで、洛貞が彼らを見下ろしていると思っているのだ。（浮き草：186）

（22C）那時候一塊打牌的一個邱先生對荀太太十分傾倒。（相見歡：87）

（22J）あの時、マージャン仲間だった邱氏は、荀太太をまんざらでもなく思っていた。（お久しぶり：222）

（20J）の「彼は……かと思った。」では、「……と思った」と表現されており、主体の思考の内容が示されているが、（20C）では、「思う」表現は見られない。

（21J）の「洛貞が彼らを見下ろしていると思っているのだ」の中の「思っている」は、彼らの思考内容を表現しているが、（21C）には「思う」表現は見られない。

そして（22J）の「邱氏は、荀太太を……思っていた」の「思っていた」は、邱氏の荀太太への思いを語っているのに対し、中国語テキストの（22C）には「思う」表現は見られない。

このように、実際には中国語テキストで行動を指していても日本語訳のように「思う」表現で示されない場合もある。

翻訳テキストがあくまで〈乗り継ぎする主体〉の作品であればこそ、どのような言語形式が表層化するかは、翻訳者の決断による。しかし、表現が翻訳されるかどうかによって生じる意味の違いはまちまちである。中国語に行為を指す「思う」が使われないことで、かなりの意味のギャップを生むこともある。

「思う」表現の三種の機能に共通して言えることは、「思う」で印づけることで、語り手が同時に〈経験する主体〉と〈語る主体〉の両者である可能性を秘めていることである。このようにして語り手は、物語の場に進入したり、その場から消え去ったりして、色々な

〈声〉を伝えることが出来る。その結果、読者は異なった視点から場を見つめることになり、そこには異なった〈見え〉が生まれる。「思う」で印づけられたテキスト部分と、そうでないテキスト部分では自ずとそのレトリック効果が違ってくるのである。そのような効果が中国語原作より日本語テキストで多く見られ、中国語原作では消えてしまう傾向がある。日本語を使う語り手は、こうして語り手の存在感に変化を持たせながら、読者の興味を誘うことが出来る。

「思う」表現を観察すると、その使用によって、語り手の異なった心理状態や情意が表現されることがわかるのであるが、それはあくまでパトス的なレトリックの技法である。語り手としての主体の内面を読者に向けてどのように語るか、というその操作には「思う」とざっくばらんに表現したり、或いは主体のためらいや、「思う」行為への距離を置いた見方が表現される。そのパトスのレトリックはまたしても、中国語では好まれる形ではないことが分かった。中国語に「思う」表現がないとか、まったく使わないとか言うわけではないが、ある種の使い方が好まれるか好まれないか、という点で、確かに日本語との差が認められるのである。

以上、レトリックの技法に関して観察したが、これら全てが語り手の〈情意〉にかかわっているのであり、語り手の人間性がにじみ出ているといってもよい。この語り手の情意が、小説を読む上での楽しみであることも事実である。

五、結び

以上、日本語と中国語の視座の選択と自己引用にまつわるレトリック効果を考察した。日本語のテキストで使われる表現は、その使用非使用を操作することによって、中国語テキストでは表現し難い微妙な、しかし重要な効果を果たしている。

我々が観察した中国語テキストと日本語翻訳の表現差異は、中国語テキストには<感じる主体>としての語り手が前景化されにくいことによる。情報は、もし充分伝わらない場合に何らかのギャップ

が生まれ、気付くことが比較的容易だが、これに対してある言語にコード化されていない感情は、言語表現されない限り感じとることは困難であり、そもそもこうする感情がないことが問題とされないため、〈情意〉のギャップは気付きにくい。

さらに、語り手の物語の中の位置が、読者の内容解釈に少なからず影響を与えるという事実が実証的に報告されており(Dixon and Bortolussi)、そのため、原文と翻訳文の読み方も違ってくるのである。

翻訳には、このような問題が残されているが、パトスに焦点を当てることで、言語間の語り手の情意や文学的パトスの差異を理解することを可能にするのである。本研究で比較対照の考察をしたテキストによると、やはり日本語はパトス的なレトリック法を通して自分の思いを表現している、といえるのである。将来は、観察、解釈した範囲をさらに広め、異なったジャンルのパトスのレトリック研究を進めたり、原文が日本語である作品が中国語に訳された場合のテキストを用いて、研究の範囲を広げ、日本語で伝えられる語り手の諸種のパトス性が、中国語テキストにパトス的なレトリックが果たして存在するのかについての研究は、これから更なる課題である。

参考文献

アイリーン・チャン著・南雲智訳（2007）『ラスト・コーション』集英社

市川浩（1975）『精神としての身体』東京：勁草書房

周欣佳（2009）「翻訳文学における語り手の情意」『東方技術学院 2009 外國語文教學研討會論文集』東方技術學院

泉子・K・メイナード（2000）『情意の言語学—場交渉と日本語表現のパトス』くろしお出版

泉子・K・メイナード（2005）『談話分析の可能性』くろしお出版

張愛玲（2007）『惘然記』皇冠文化出版

宮崎清孝・上野直樹（1985）『視点』東京：東京大学出版会

Becker, A. L. (1995) Beyond Translation: Essays toward a Modern

Philology. Ann Argor: The University of Michigan Press.

Dixon, Peter and Marisa Bortolussi. (1996) Literary communication: Effects of reader-narrator cooperation. Poetics, 23, 405-430.

Jakobson, Roman. (1971) On linguistic aspects of translation. In Selected Writings, Vol. 2, 260-266. The Hague: Mouton

Lakoff, Robin (1980) How to look as if you aren't doing anything with words: Speech Act Qualification. Versus2, 29-47. Milan: Bompiani.

Maynard, Senko K. (1998) Ventriloquism in text and talk: Functions of self- and other- quotation in Japanese discourse. Japanese/Korean Linguistics, 7, 17-37. Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.

Stanzel, Franz. (1971) Narrative Situations in the Novel: Tom Jones, Moby-Dick, The Ambassadors, Ulysses. Tans. By J. P. Pusack. Bloomington, IN: Indiana University Press.